

MINUSTAH 司令部に参加して

平成 23 年 2 月 28 日

MINUSTAH 司令部施設幕僚：1 等陸尉 佐藤 裕一

MINUSTAH 司令部兵^{へいたん}站幕僚：1 等陸尉 田代 供和

1 はじめに

2010 年 1 月 12 日に発生した大地震により大きな打撃を受けたハイチ共和国の復興支援のため、現在約 330 名の自衛官による部隊が国連ハイチ安定化ミッション (MINUSTAH) に参加しています。今回は、この日本隊を支えるため、MINUSTAH 司令部で勤務するお二人の自衛官に、現場での体験を話してもらいました。

佐藤 1 等陸尉：MINUSTAH 任務支援局の Force Engineering Military Section (FEMIL SEC：工兵課) にて勤務。この部署は、各国の工兵部隊が実施する工兵作業の調整を行う部門です。佐藤 1 尉は、ハイチで自衛隊が実施する様々な工兵活動を支えています。

田代 1 等陸尉：MINUSTAH 軍事部門の U - 4 (兵站部) にて勤務。この部署は各国部隊に対する兵站支援の調整を行う部門です。田代 1 尉はハイチで活動する様々な国の部隊の兵站活動を支えています。

司会：普段の業務について教えてください。

佐藤：職務については、その大部分が日本隊及び作業依頼元との調整業務です。仕事の流れとしては、各国の部隊からの宿営地造成、NGO 等からの瓦礫の除去等の作業依頼が FEMILSEC のチーフの元に届きます。この各作業依頼を吟味し、日本隊の能力・規模に適切な活動を選定し、日本隊の担当者と実行要領について打ち合わせします。

田代：私の職務は、各国の部隊が使用する施設等に関する問題を他の部署と調整して解決していくことです。例えば、2010 年 11 月の大統領選挙の際には、選挙監視支援のため人手が必要になり、ある宿営地のネパール歩兵部隊は 2 倍に増員しました。すると、生活空間やトイレ・シャワーなどの施設が十分機能しなくなりました。この問題を解決するため、私が当該部隊の宿営地に赴き（これを兵站偵察という）、宿営地施設の具体的に何が不足しているかを確認して、MINUSTAH の補給倉庫から物資を送るよう調整して問題を解決しました。2010 年後半は大統領選挙の他に、コレラやハリケーン等、様々なことが立て続けに起こったため、対応していくのが大変でした。

司会：兵站偵察では遠いところまで行くこともあるのでしょうか？

田代：国の端から端まで移動します。移動にはヘリコプターを使用します。2010年の忙しい時期には週に2回は出張しました。



ヘリコプターで出張する田代1尉

司会：苦労した点を教えてください。

佐藤：様々な国や地域から MINUSTAH に参加しているため、文化の違いが職務に影響することが多々ありました。たとえば、ある国の部隊は、良く言うとフットワークが軽い、悪く言うと適当です。作業依頼があれば、とりあえず命令文書を作成し、工兵部隊に作業を始めさせようとしています。しかし、事前調整がきちりとできていないため、作業は当然途中で止まってしまう場面が発生します。この点、日本隊は日本での業務同様作業を実施する前に入念な調整を実施するため、作業は中断することなくスムーズになります。ですので、私が日本隊との調整を入念にしていると、他国の同僚は作業開始が遅いとイライラしているように感じる事もあります。どちらの実施要領がハイチでは良いのか分かりません。

田代：私も、他国の部隊から早急な回答を求められるということはよくあります。ある作業を日本隊で実施できるか調整してほしいと U-4 の上司に頼まれ、数時間の内の回答を要求されます。

佐藤：そのような中、韓国軍は、日本と同様に事前調整を重視します。やはり同じアジアの国同士、調整がスムーズなことも多いですね。

司会：他に文化の違いを感じたことはありましたか。

佐藤：たとえば、昼食をとるために昼休みを2時間位とるとか。あと、朝礼もなければ遅刻してくる職員もいる。しかしきちり終業時間の5時には帰宅するなど仕事に対する考え方の違いを感じています。

田代：私は、クリスマスに休暇を取らずに仕事をした際に、同僚に非常に感謝されました。やはり欧米の人達は、クリスマスは家族と過ごすのが重要なようです。

司会：仕事をしていてやりがいを感じるのはこういった時ですか。

佐藤：日本隊がマルパセ孤児院の寮を建設し、1月に孤児院への引渡式が実施されました。
([📄マルパセ孤児院 孤児代表謝辞](#)) 子供達は本当に喜んでいて、その笑顔を見て、本

当にやって良かったと思いました。また、施設作業終了後に、作業の依頼元である NGO 団体等からお礼のメールが届けられ、やりがいを感じました。

田代：私は、兵站偵察実施後、スリランカ部隊やネパール部隊の施設の問題について資料を作成した際、直属の上司がその資料を MINUSTAH の軍事部門の司令官への説明資料として使用しました。自分の仕事が認められたようで本当に嬉しかったです。

司会：職場の雰囲気についてお聞かせ下さい。

佐藤：私の場合、オフィスは同じ工兵職種の人ばかりなので、話も合い、チームワークは良いと思います。皆で食事に行ったりもします。

田代：私の職場も雰囲気は良いです。時には冗談が飛び交ったりもします。また、たとえ相手が上司でも率直に意見が言える点は業務上とても効率的だと感じています。



電話で仕事の調整をする佐藤 1 尉

司会：他国から見た日本の印象についてどう感じますか。

佐藤：日本の工兵部隊の技術力の高さには各国とも一目置いていると思います。先日もブラジルの少佐から、日本の工兵部隊は非常に評価が高く、評判が良いので、これからも日本の PKO 派遣は増えるのではないかと言われました。やはりキメ細かい日本隊の仕事は世界で認められていると思います。

田代：日本は PKO における活動について法律で細かく定められていますが、この点は十分に理解されていないと感じることもあります。たとえば、U-3（作戦部）のチーフは日本の PKO 活動における制約を理解しており、何ができて何ができないかを理解しているので、仕事の割り振りがスムーズです。他方、我が国の事情をあまり理解していない上司は、日本が法律上実施出来ない任務を振って来たりします。この辺りは地道に理解を求めていくしかないと思います。

司会：この対談を読んで下さった皆様に最後に一言お願いします。

佐藤：様々な国の軍人・文官に囲まれて任務を遂行することは、大変なことも多々ありますが、本当に勉強になり充実しています。後輩の自衛官には是非積極的に希望してもらいたいと思いますね。

田代：私は、他国の人から日本の文化について聞かれた際に、うまく答えられなかったことがあり、深く反省しました。後日調べて一生懸命説明しましたが、私たちが日本で普

段目に留めないようなことが他国の人には新鮮に映るようです。国際舞台で活躍しようとするならば、まずは日本の文化を勉強し、外国の人に語れる能力が重要だと実感しました。



マルバセの子供達とねぶたを踊る自衛隊

対談を終えて：PKO 政策を考えると、私達はどうしても部隊として何ができるかということを考えます。しかし、この部隊を支えるために、司令部内のしかるべきポストに、日本の要員を配置することが重要であると感じました。そのためにも、何か事があってから動くのではなく、日本として長期的な PKO 戦略をしっかりと持ち、現場の声をフィードバックしていく仕組みが必要だと思いました。

聞き手：ハイチ連絡調整事務所長 川崎 修平

同所員 杉原 逸樹